

板野博行の 夏期講習DVD 現代文・基礎編

— 付属テキスト —

- 【一】 外山滋比古『日本語の論理』
～ 四天王寺大学 人文社会学部 (一部改編)
- 【二】 丸山真男・加藤周一『翻訳と日本の近代』
～ 法政大学 法学部 (一部改編)
- 【三】 鷺田清一『てつがくを着て、まちを歩こう』
～ 近畿大学 A日程
- 【四】 三浦雅士『よみがえった身体呪術』
～ 大東文化大学 全学部
- 【五】 柏木博の文章による
～ 甲南大学 経済学部 (一部改編)

『板野の入試国語DVD講座』のご案内

この度は『板野の入試国語DVD講座』をお買い上げいただき誠にありがとうございます。この教材で学習を始める前に、以下の点についてのご確認をお願いします。

■ 学習方法に関して

まずは Disk 1 に収録されている「ガイダンス」を見ましょう。この教材の学習目的から夏の勉強計画、効果的な学習法などを解説しています。

このガイダンスで、入試本番までの全体を見渡す広い視野と、この夏における到達目標をしっかりと持つことが大切です。

そして付属テキストに掲載されている問題を解きましょう。

この夏期講習の教材では、制限時間を意識して解くよりも、1問1問をしっかりと考えて解くということを心掛けて下さい。演習の中で解らない単語や語句などがあれば、解説授業を見る前に辞書などで調べておくとう良いでしょう。

問題を解き終えたら、該当する「解答・解説授業」にて板野先生による解説授業をご覧ください。授業では大事なポイントを板書していきますので、書き写すノートもご用意下さい。

1度授業を見終えても、時間をおいて再度復習を重ねましょう。さらなる理解が深まります。知識や解法がしっかりマスターできるまで、繰り返し学習することが合格への近道です。

■ サポートに関して

DVD 授業の中での解らない点については、メールによる質問・相談サポートを行っております。

ご質問は「イエジューク」(<http://iejuku.jp/>)内の「サポート」ページよりお問い合わせ下さい。

サポートフォームの「件名」欄に 該当の商品名、「お問い合わせ内容」欄に 質問の内容 を詳しくご記入下さい。

いただいたご質問への回答は、メールにて行いますので、メールアドレスの入力はお間違えないようお願いいたします。また、@iejuku.jp ドメインからのメールを受信できるよう各自設定をお願いいたします。



1

出典：外山滋比古

『日本語の論理』

四天王寺大学 人文社会学部

制限時間 25 分

解答・解説DVD — Disk 1

【偏差値換算表】

50 点	—	偏差値 65
44 点	—	偏差値 60
40 点	—	偏差値 55
★36 点	—	偏差値 50
32 点	—	偏差値 45

(★マークは合格ライン)

【一】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

論理についてわれわれは三つの次元を考えることができる。ひとつは論理学で問題とする形式論理である。多くの日本人は知識としてこの論理を知ってはいても、生活には融けこんでいない。何かひどく冷たいもののように感じている。それによってものを考え表現することはむしろまれであろう。

もうひとつは、日本語に即した論理で、これは日本語を使っているときには多少ともたえず作用しているはずのものであるが、ほとんど意識されることがない。しいてとりだすならば形式論理とはちがった不定形で柔か味のある道理とか筋道のようなものとなるであろう。さらに、この硬軟二つの論理の間に、和訳文の論理が考えられる。これは、外国語と母国語を比較して外国語の発想と表現が母国語といちじるしくちがうという実感にもとづく、比較論理とも言うべきものによって育てられる論理の意識である。明治以来の知識人のいできてきた論理コムプレックスもこれに根ざしているのである。わが国における外国語学習者の数が激増してほとんどすべての国民が外国語を学ぶ経験をもつようになって現在、外国語に内包されている論理と母国語の無意識的論理との摩擦で生じるこの第三の論理の重要性はいよいよ大きくなりつつあるように思われる。

ここでは、形式論理は一応問題から外して、日本語に即して認められる論理を中心に、翻訳を媒介として認められる比較論理の問題もカミ^①ミ^②して考えて行くことにしたい。

日常の言語活動における論理は、話の筋道といったごくインフォーマルなものである。どんな場合でも、言葉に筋道が通っていないければ、伝達は成立しようがない。「筋」とか「筋道」とかいう語が示しているように言語に内在する論理性は何か「線」のようなものと感じられているのが普通である。ア

表現の受け手はこの言葉の筋道をたどりながら理解を進めて行くわけだが、送り手との間の心理的關係のシン^②によって筋道の性格も変ってくる。送り手と受け手が未知の人間であるような場合、筋道はしっかりした線状をなしていて、受け手がそれから脱落しないようになっていなくてはならない。論理は密でなくてはならないのである。その典型的な例は法律の表現で、こ

れは受け手がときとしてはまったく対立する観点に立っていることがある。したがって、表現の道筋はあくまで太くしっかりしたものである必要がある。かりにもその筋を外した解釈が可能であつては不都合がおこるからである。多くの人々が法律の条文を^③うるさいものと感ずるのは偶然ではない。送り手が受け手を信頼していないのである。法律でなくても、受け手の連帯感が保証されていないとき、表現は念には念を入れて、誤解のおこらないように配慮されたものになる。イ

これと反対に、受け手がごく身近かに感じられているときの表現はわかりきったことをくどくどと説明する必要がない。要点だけをかいつまんでのべるだけで誤解も生じない。言語の^④冗語性も小さくてすむのである。一般に相互が熟知しているような集団の内部においては形式的論理はむしろ敬遠される。その代表的な例は家族同士の会話である。第三者が聞けば何のことかまるでわからぬような省略の多い飛躍した言い方をしているが、それでけつこう話は通じ合っている。形式論理から見れば没論理と言えるかもしれないが、まったく論理を欠いているというわけでもないであろう。A^④別種の論理が作用していると見るべきである。ウ

相互によく理解し合っている人間同士の伝達においては言葉の筋道はつねに完全な線状である必要はないことが多い。要点は注目されるが、それ以外の部分はどうでもよい。^⑤等閑に付されたところはやがて風化がおこるのである。こうして、方々が風化して線に欠落ができる、線の筋が点の列になつて行く。親しいと感じ合っている人たちの間の言語における論理は線ではなくて点の並んだようなものになつている。エ

人間には、こういう点をつなげて線として感じとる能力がだれにもそなわつているのである。B、点的論理が了解されるところでは線の論理の窮屈さは野暮な^⑥ものとして嫌われるようになる。なるべく省略の多い、言いかえると、解釈の余地の大きい表現が、^⑥ガンチクのあるおもしろい言葉として喜ばれる。点を線にするのは一種の言語的創造をとまなうからであろう。点の線化は昔の人が星の点を結び合わせて図形を読みとり、名を^⑦カンして星座をつくりあげたことなどにもあらわれている。

日本語はヨーロッパの言語が陸続きの外国をもつた国で発達したのちがって、島国の言語である。同一言語を同一民族が長い期間にわたつて使つていれば、相互の了解度はきわめて高くなる。家族語におけるような論理が社会の広い範囲に流通してい

ると考えてよい。そういう日本語の論理は線性格のものではなくて、点的性格の方がよく発達しているのは自然のことである。念には念を入れた、がっちりした構成の表現はむしろ重苦しいものと感じられる。上手な人のうつ囲碁の石のように一見は飛んでいるようであっても、その点と点を結び合わせる感覚が下敷きになっているときは決して非論理でも没論理でもなく、りっぱに「筋」をもっているのである。　　オ

日本語が論理的でないように考えられるのは、ヨーロッパ語の線論理の尺度によって日本語をおしはかるからである。^⑧ 成
熟した言語社会の点的論理を認めるならば日本語はそれなりの論理をもっていることがわかる。よく引き合いに出される禅にしても、点的論理の概念をとり入れることによって、その独自の論理性は充分合理的に説明できるはずである。□C、俳句の表現もいわゆる論理、線状の論理からは理解しにくいものであるが、点的論理の視点からすればきわめて興味あるものになる。考えようによっては、点的論理がよく発達した言語社会だからこそ俳句のような短詩型文学が可能になったのだと言うこともできる。

点的論理の背後には陥没した線の論理がかくれて下敷きになっている。そして点を統合して線として感じるところに表現理解の創造的性格がひそんでいる。どんなにしても踏み外すことのない太い線をたどることがおよそ退屈であるのとはタイ^⑨シヨウ^⑩ウ^⑪的である。

(外山滋比古『日本語の論理』による)

(注) 冗語——よけいな言葉

問1 傍線部①・②・⑥・⑦・⑨に該当する漢字と、同じ漢字を用いるものを、ア～オのうちから、それぞれ一つ選びなさい。

① カミ

ア 親ミになつて相談に乗る

イ 審議ミ了

ウ 前後のミ境なく行動する

エ 聴衆の心をミ了する

オ 名作をじっくりミ読する

② シンソ

ア 質ソな生活をする

イ ソ末な身なりをする

ウ 意思のソ通を欠く

エ 進入をソ止する

オ 裁判所に提ソする

⑥ ガンチク

ア ガン強に抵抗する

イ 矛盾点を包ガンする

ウ 論文のガン目

エ ーガンとなつて取り組む

オ 厚ガン無恥

⑦ カンして

ア 手紙にカン省と書く

イ 突カン工事で間に合わせる

ウ 製鉄は基カン産業と言われた

エ 中東のカン衝地帯

オ 悪い習カンを改める

⑨ タイシヨウ

ア 高シヨウな趣味を持つ

イ 子供を愛シヨウで呼ぶ

ウ 戸籍シヨウ本を取り寄せる

エ 的にシヨウ準を合わせる

オ シヨウ徴的な事が起こる

問2 傍線部③「うるさい」のここでの意味として、最も適当なものを、ア～オのうちから一つ選びなさい。

ア 念には念を入れて要点を丁寧の説明している

イ さまざまな解釈の余地のある表現が数多くある

ウ 種々の論理が入り混じった表現になっている

エ 誤解を招かないように当然のことまでも説明している

オ ある立場とその反対の立場との両方の立場から説明している

問3 空欄A～Cを補うのに、最も適当なものを、ア～オのうちから、それぞれ一つ選びなさい。

A ア いわゆる イ そして ウ けれども エ あるいは オ むしろ

B ア したがって イ すなわち ウ または エ しかし オ ただし

C ア なぜなら イ たとえば ウ だが エ また オ ところで

問4 傍線部④「別種の論理」に属さないものを、ア～オのうちから二つ選びなさい。ただし、解答の順序は問わない。

ア 禅 イ 法律 ウ 論理学 エ 家族の会話 オ 俳句

問5 傍線部⑤「等閑に付された」の意味として、最も適当なものを、ア～オのうちから一つ選びなさい。

ア ほぼ同じと見なされた イ おろそかに扱われた ウ 暇が無いと判断された

エ ぐどぐどと説明された オ 等間隔に並んだ

問6 傍線部⑧「成熟した」のここでの意味として、最も適当なものを、ア～オのうちから一つ選びなさい。

- ア 他の国よりも長い歴史を持っている
- イ 同一民族が築き上げてきた
- ウ 囲碁のかなりうまい人が多くいる
- エ 構成員が相互によく理解し合っている
- オ 短詩型文学がよく発達した

問7 この文章からは、次の一文が欠落している。もとの位置に戻すとき、その位置として最も適当なものを、本文中のア～オのうちから一つ選びなさい。

緊密な論理はその結果にすぎない。

問8 次の1～6の各文について、本文の内容と合致するものにはアを、合致しないものにはイを、それぞれ答えなさい。

- 1 日本には、点的論理がよく発達しているので、それ以外の論理は無くてもかまわない。
- 2 日本人は、形式論理をあまり用いないが、もう少し用いるようにすべきである。
- 3 外国語と日本語とを比較して得られる論理の意識は、今後重要になると考えられる。
- 4 線の論理で書かれた法律の表現は、日本人には受け入れることができないものである。
- 5 点的論理で表現されたものから線の論理を読み取るとは、創造的な行為と言える。
- 6 論理を考える際には、地理や歴史など、社会のありようを考慮に入れる必要がある。

(以下余白)

2

出典：丸山真男・加藤周一
『翻訳と日本の近代』「あとがき」
法政大学 法学部

制限時間 25 分
解答・解説DVD — Disk 2

【偏差値換算表】

50 点	—	偏差値 65
★ 44 点	—	偏差値 60
38 点	—	偏差値 55
32 点	—	偏差値 50
30 点	—	偏差値 45

(★マークは合格ライン)

【二】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

「明治初期の翻訳」という話題を、同時的にみれば、日本の「近代化」の過程と切り離して考えることができない。西洋社会を模範とする近代化の前提の一つは、広汎な西洋の文献の翻訳だからである。また同じ話題を A にみれば、その前段階としての徳川の文化を考慮せざるをえない。あの驚くべき短期間に、文化のほとんどあらゆる領域にわたって、高度に洗練された翻訳をなし遂げるためには、日本社会の側に然るべき歴史的な経験と、^①言語学的手段と、さらには知的能力がなければならぬ。

徳川時代の文化の大きな部分（主として知的・思想的な領域での大きな部分）は、翻訳文化であった。いわゆる「読み下し漢文」は、^②徂徠も指摘したように中国語文献（主として古典）の翻訳であり、その語彙や表現法を採り入れて消化した日本語を媒介とする文化——すなわち徳川時代の儒者の文化の全体が、その意味での翻訳文化である。その経験が明治の西洋語文献からのがかりな翻訳を助けたのであり、近代日本を作りだした、ということが出来る。

^③翻訳文化は必ずしも独創を排除しない。徳川時代の文化の獨創性は、「読み下し漢文」に依るところ少ない浄瑠璃や俳諧ばかりでなく、漢文の概念を駆使しての、儒者の思想的な仕事にもある。日本の学者は必ずしも同時代の中国の学者の後を追ったのではなかった。明治以後の文化についても、少なくともある程度までは、同じことが言えるだろう。

翻訳文化はまた^④その国の文化的自立を脅かすものではない。むしろ逆に文化的自立を強化する面を含む。翻訳は外国の概念や思想の単なる受容ではなく、幸いにして、または不幸にして、常に外来文化の自国の伝統による変容だからである。外来の思想は、必ずしも知識層と大衆との間の溝を、長期にわたって掘げるようには作用しない。そのことを明治初期の翻訳者たちは——少なくともその一部は——あきらかに意識していた。もし文化的創造や革新的思想が、知識人と大衆との深い接触を通じて成り立つものとすれば、翻訳文化は想像力を刺戟しても抑えはしないはずである。

しかし外国語から日本語への翻訳は、その外国が中国であっても、西洋諸国であっても、常に文化の「一方通行」の手段であった。異文化間の接触が、「両面通行」であり得るためには、日本語から外国語への逆翻訳が同時に行われるか、複数の文化に共通の言語、

lingua franca が必要にならない。逆翻訳は、江戸時代においても、明治以後近代においても、きわめて稀な例外でしかなかった。lingua franca (または国際語) は、中世のヨーロッパには存在したが、一九世紀から二〇世紀の前半にかけての世界には存在しなかった。かくして文化的「一方通行」は、鎖国の日本ばかりでなく、近代日本をも特徴づけることになったのである。

文化の「一方通行」は、国際社会における孤立を意味する。その孤立を破り、国際社会において自己を主張するために、近代日本が採った手段は、まず軍事力であり、軍事力による自己主張の失敗の後には、経済力であった。しかし円滑なコミュニケーションを伴わない経済力による自己主張には限界があり、円滑なコミュニケーションは、文化的孤立の条件のもとでは成り立たない。

現在の状況は、もちろん明治初期のそれとは大いに異なる。今ここでその詳細に立ち入ることはできないが、その一つは国際語としての英語の圧倒的な力である。二つの地域語としての英語と日本語の関係と、国際語⇨英語と地域語⇨日本語との関係はちがう。今日の日本は、明治初期の日本が解こうとした問題——翻訳と文化的自立、翻訳文化の「一方通行」と国際的コミュニケーションの要請というような問題を、^④異なる条件のもとで解かざるをえない、ということになろう。

明治の翻訳主義の検討は、今日の視点からこそ殊に大きな意味をもつだろうと思われる。

(丸山真男・加藤周一『翻訳と日本の近代』「あとがき」より)

(注) 徂徠——荻生徂徠(一六六六～一七二八)。江戸中期の儒学者。

問1 文中の空欄 A に入る最も適切な語句をつぎの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- 1 共時的
- 2 本質的
- 3 常識的
- 4 時代的
- 5 通時的

問2 傍線部①の「言語学的手段」とは具体的には何をさすか。本文中から一〇字以内で書き出せ。

問3 傍線部②に「翻訳文化は必ずしも独創を排除しない」とあるが、特に儒者の思想的な仕事は独創性を排除しなかったのはなぜか。つぎの中から適切なものを二つ選び、記号で答えなさい。

- 1 いかにして翻訳するかについて、翻訳者独自の創意工夫がみられたから。
- 2 儒者は、翻訳語を使いつつも、外来思想を変容して独自の思想を形成したから。
- 3 翻訳文化と同時に、その影響を受けていない日本独自の文化の成熟がみられたから。
- 4 儒者は、外国の同時代の文献ではなく、「古典」を対象として独自の解釈をおこなったから。
- 5 儒者は、古典を尊重するを通して、日本古来の伝統を保持することに寄与したから。
- 6 儒者は中国の文献を翻訳する際、大衆との深い接触を通じて独自の思想を形成したから。

問4 傍線部③に、翻訳文化が「その国の文化的自立を脅かすものではない。むしろ逆に文化的自立を強化する面を含む」とあるが、それはなぜか。筆者の考えに照らして適切なものをつぎの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- 1 異文化と遭遇する経験によって、自国文化の持つ欠点が認識され、それが改善されやすいから。
- 2 翻訳を担う人々が、知的営為を絶やさないことにより、自国の文化を牽引するから。
- 3 外来文化を経験し、それと比較することにより、自国文化の美点への愛着が深まるから。
- 4 文化とは、そもそも外来文化の流入によって進化していく柔軟な存在であるから。
- 5 翻訳によって、知識人だけでなく広汎な大衆が文化の創造と支持の基盤となりうるから。
- 6 翻訳の際には、自国文化の文脈で解釈と変容がなされ、外来文化自体が流入するのではないから。

問5 傍線部④に「異なる条件」とあるが、明治の初期と現在とでは、何がどう異なっているのか。本文全体の内容に基づいて、

つぎの中から適切なものを二つ選び、記号で答えなさい。

- 1 明治初期には、圧倒的な国際語は存在していなかったが、現在では英語が国際語として圧倒的な力を持っているため、日本文化の異文化への翻訳可能性は、英語を通して考えざるを得ない。
- 2 明治初期にはまだ日本の近代化がなされておらず、翻訳には日本の近代化を支援する普遍的原理に関わる内容が求められたが、現在では、むしろ異文化の持つ特殊なものが求められている。
- 3 明治初期には、西欧列強の圧力によって日本の文化的自立が脅かされていたが、現在では経済発展によって日本の地位は確固たるものになっており、文化的自立が脅かされる事態はなくなっている。
- 4 明治初期には、西欧型近代化が国策となったことから、西欧語文献から日本語への一方向的翻訳に限られていたが、現在では日本の国際的地位の向上を背景にして、双方向的な文化交流がなされている。
- 5 明治初期の日本は、国際社会の中で文化交流を通して自己を主張しようとする発想に乏しかったが、現在の日本は、経済力の大きさと文化的発信の小ささとの乖離が大きく、その乖離を埋める必要がある。
- 6 明治初期には、日本の伝統的文化はまだ保たれていたが、現在では、社会の近代化に伴う欧米文化の流入によって、日本の伝統文化は失われつつあり、自国の文化を保持することが大きな課題となっている。

(以下余白)

3

出典：鷲田清一

『てつがくを着て、まちを歩こう』

近畿大学 A日程

制限時間 30 分

解答・解説DVD — Disk 2

【偏差値換算表】

45 点	—	偏差値 70
40 点	—	偏差値 65
35 点	—	偏差値 60
★ 30 点	—	偏差値 55
25 点	—	偏差値 50

(★マークは合格ライン)

【三】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

ファッション・デザイナーには建築学の出身のひとがときどきいる。鉄筋コンクリートの建築と柔らかい繊維のファッション。材質は正反対だが、両者が近いのは、建築設計もファッション・デザインもともに身体空間を演出するものという共通点をもつからだ。

布で身を囲う、壁で身を囲う。確かにそうはいえる。まるで赤剥けむになった様な膚をさらして生きる人間には、被膜ひまくがいる。防御の囲いがある。だから衣服と建築を、からだのもっとも近い囲いと、中間距離の囲い（あるいは家族というからだの囲い？）として、それら衣服と建物を類比的に考えることもできるわけだ。

だが、皮膚、衣服、建物というふうには、肉の塊としてのからだを包む被膜をからだに近いほうから順に考えるところは、からだを空間のなかにあるひとつの物として考えたときの話だ。そう、まるで外部からの観察者のように。しかし、わたしたちはからだを観察するものである前に、まずからだとしてある。そのからだのある場所に、である。

能で面をつけることについて、土屋恵一郎さんがとても面白いことを書いています。

面をつける①と裸①になつたような気分になるという感想を聞いたことがあるが、面をつけるというのはじぶんの視野のうちからじぶんの姿を消すことだ。面をつけたとき、ひとはそのからだを剥はぎとられ、観客の視野のうちに漂い始める。からだは物としては消え、その位置も定かではなくって、とても不安定な状態になる。「能の独特の身体の構えは、この不安への構えである。身体感覚の浮遊をしっかりと支えるものとして、能の構えはつくられている」というのである。

しかし、ここで面はほんとうはわたしたちのからだなのだ。わたしたちはからだでありながら、そのからだはじぶんの視野にほとんど入ってこない。そういう定かではないものとして、からだとしてのじぶんの存在はある。そういう不安定な状態のなかでわたしたちはある構え②を取る。「構えのうちで内側から力の束のまわりに身体の中心を組織しなおして、その受動態を押し返していく」のである。

こういうからだの「押し返し」と連動するものとして衣服があり、建築がある。

物としてみれば、からだと衣服の関係とからだと建築の関係とは、ほぼ並行した関係にあるのはすぐにわかる。帽子と軒のひさし、夏にきものが皮膚に汗で張り付かないように僧侶が装着する竹編みの下着と、木造の家屋で夏に襖ふすまを開け放ち、庭に水打ちをして室内の空気を移動させる工夫。妖あやしげな下着の存在と、奥まったほの暗い空間。あるいはこんな対比も。たとえば一方に、居住空間の内部と外部を壁で嚴重に仕切る洋風建築とからだを隙間すきまなく梱包する洋服、他方に、取り外しのきく建具で内部と外部を通わせる和風建築とからだとの隙間にある空気が重んじられるきもの。からだの構造に家具のほうを合わす洋風家具（たとえば椅子）とからだを家具のほうに合わす和風家具（たとえば座布団）。

だがほんとうの問題はおそらくそういうところにはない。③問題は、不安定なからだのあの「押し返し」の構えと連動するような衣服の作用、建築の作用だ。からだという方で「わたし」が挿入されているその空間の密度や強度、へわたし」が浸されているその空気の気配や感触、そしてそれらの力線を設計することだ。ファッショ^ン・デザインも建築デザインも、空間のデザインなのであって、物のデザインなのではない。

かつてからだの化粧は、自然を模倣するものであった。自然のなかにあつて自然と拮抗しようとするものであった。鳥の羽や獣の皮で身を飾り、花や蝶たちに負けないような鮮やかな色を膚はだに塗りたくった。

身をすっぽり被おびうような衣服の文化を生み出すとともに、衣服は第二の皮膚となった。そうすると、皮膚のすぐ外側という、本来からだの外側である場所が、衣服の内部、ということとは「わたし」の秘密の内部となつて、そこに手を入れられるだけで不快な気分になる。服をあらわにすることがじぶんをむきだしの無防備な状態に置くことになる。個人の表面が皮膚から衣服の表面へと移動することで、感情のあり方まで変わってしまったのである。

皮膚は皮膚のコピーをつくることでこの新たな皮膚のうちに立てこもつたのである。かわりにこのコピーが、たとえばからだに切れ目を入れたり、見え方を変えることで、身体に新しい意味づけを与えることになった。みっともないからだの外見をエレ

ガントに演出するとともに、逆にこんどは、衣服からのぞくボディが、むきだしの裸体よりはるかに誘惑的な秘密のボディとなったのである。こうして^④裸体よりもつと魅惑的なヌードが生まれた。衣服という装置によって。

「たしかなのは、コピーをつくることによつて、文化というものが生まれてきた、ということである。文化というものは、あるものをA地点からB地点へ移すところから生まれる。^⑤移動がなければ、文化というものは生まれてこない」（多田道太郎）。布へと移された皮膚。この皮膚は、習慣が「第二の自然」と呼ばれるように、「第二の皮膚」とよばれてきた。コスチュームとカスタム（習慣）が同じ語源からきているのも、そういうわけなのである。

生まれたときにいるんなニュアンスをもっていた発声が、特定の母音・子音の組み合わせでできた言語へとその構造を交換することでもとの自然的な発声を忘れるように、わたしたちはけがをしても「ぎゃあ」と声をあげずにとっさに「いたい」と叫ぶ。文化という次元をみずからの存在のなかに築きあげたわたしたちには、もはや純然たる自然などというものはない。アウトドア派とか自然派というけれど、かれらがRV車ででかけるのはキャンプ場であり、自然公園なのであつて、そこでカジュアルなルックに身を包み、缶詰をあけてシヨップで買った燃料で調理をするのである。「自然」もまたわたしたちの文化のなかにある。「自然」はここではイメージに還元されているのである。

一時期、エコ・ファッションというのが流行したことがあつた。暖色系のくすんだ色がアース・カラーとしてもはやされ、動物保護の意識から人工スエードやフェイク・ファーが人気商品になつた。ここに思い描かれているものもまたイメージとしての自然であつて、血や唐がらしの鮮やかな赤、硫黄やひまわりの焼け付くような黄、空や瑠璃の深い青はそこにはない。イメージとしてのエコロジーは、自然に穏やかなイメージのオブジェクトをかけて自然と共生したと思わせる点で、むしろ自然を見くびる^⑥反エコロジカルなものである。

そんな暇があつたら、わたしたちはむしろ、わたしたちの自然（人間性のこと）を英語でヒューマン・ネイチャー、つまり人間の自然という、たとえば自然どころかじぶんたちの同胞をも平気で殺戮してきた人間の忌まわしい「自然」（本性）や、ピーチ・スキンという天然素材には存在しないような極細の繊維を生みだすことで人間の感覚に新しい領野を開いたテクノロジーの可能

性にこそ思いをはすべきだろう。自然はわたしたちが思っているよりはるかに懐が深い。

僧侶の衣裳は、華麗なものも質素なものも、どれもよく目立つ。法王の衣裳、司祭の衣裳、尼僧の衣裳、修行僧の衣裳。それらは身をそっくりくるむほどに隠し、黒や白、黄色といったきわめてシンボリックな「異色」を好む。そして剃髪ていはつをはじめとする非凡なヘアスタイル。この世の日常を捨てたひと、この世を超えた世界にかかわるひととして、俗人とはことなる「異形」の存在であることが、外見からしても一目でわかる。

しかしその「異形」の存在にも、明確な構成のルールがある。衣のかたち、色、合わせ方、数珠じゆずなど、あらゆる細部に宗派ごとの特徴があり、それが別の宗教集団との差異のしるしにもなっている。つまり、それは制服の典型でもある。

要するに、「異形」であるかぎりにおいてこの世の外部と通じ、制服であるという点でこの社会の内部の一特殊集団であるわけだ。

外見という視点からすると、衣裳と宗教の関係は以上のようにみえる。だが、衣裳は見るものであると同時に、着るものである。では、^ア衣服をまとうという行為、化粧をするという行為は、どういう意味で宗教とつながりがあるのだろうか。

世界というのはわたしたちの理解を超えている。そしてその一部であるわたしたち自身もわたしたちの理解を超えている。そういう不可解なもの、超自然的なものと交わるひとつの技法としておそらく宗教はある。^注 解脱とか救済とかいったいかにも宗教語といった言葉があるが、これも解脱は自己を自己自身からできるだけ遠ざける技術であり、救済は自己と異なるものを内に呼びこむ技術だと考えればわかりやすいと教えてくれたのは、宗教学者である友人、植島啓司である。

宗教は、見えないものに包まれてまるで夢みながら生きているような生活のなかで、「すべてのものを緩やかに結びつけてしまう連想の技術」なのだといはう。教義というのもたぶんそういう連想といはうか解釈のひとつであろうが、もつと興味深いのは、世界を解釈するといはうよりも、じぶんをそっくり世界の側に委ゆだねてしまはう、あるいは、じぶんが世界に誘拐されてしまはうといはうエクスタティック（脱自的）な技術のほうだ。

宗教はじぶんを超えた何ものかに向かつて回路を開く技術としてあるのであり、宗教に修行や瞑想^{めいそう}、舞踊や香道といった身体訓練、感覚訓練がともなうのはそのためだ。じっさい、みずから恍惚状態のなかに入るために、宗教儀式では習慣的な生理のリズムからじぶんをはずす試みがなされる。断食や不眠、性的な禁欲、あるいは異様な香りや音、あるいはダンスによる身体運動の執拗な反復。そういう感覚の揺さぶりのなかでひとは恍惚や陶酔という、世界に自分が拉致されるような状態のなかに入っていく。

ファッションにもほぼ同じことがいえる。ファッションにはひととともにこの世の世界の内部に入っていく制服という面がかならずあるが、同時にファッションはひとをその **A** に連れ出そうとする。別の存在になろう、とひとびとを誘惑するのだ。それを意識においてというより、からだの外から内から、つまり視覚や皮膚感覚など^全感覚をとおしておこなうのだ。〈変身〉の技法としてである。

いまでこそナチュラル・メイクとかいって、素顔を演出するかのような化粧法が主流であるが、もともとメイクというのは非日常の異装であった。美顔術ではなくて、鳥や獣や霊になるまさに変身とエクスタシーの技法、呪術的な技法としてあった。

⑦ だから宇宙的（コスミック）と同じく「コスモス」を語源とするコスメティックという名で呼ばれてきたのだ。

現代のファッションは服装や化粧が、じぶんとは別の存在になるといって、そういうコスミックな〈変身〉の媒体であることをやめて、じぶんの別のイメージを演出するというただの〈装い〉の手段へと、みずからの力を削いできた。ただそれだけのことだ。そのぶん、ファッションと宗教の関係は見えにくくなっているが、もともとはファッションと宗教はほとんど **B** としてあった。

（鷲田清一『てつがくを着て、まちを歩こう』による。ただし、途中の章を省略したところがある）

（注） 解脱—— 煩惱の束縛から解放されて、安らかに自由な悟りの境地に達すること

問1 傍線部①の理由として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 自分の身体が視野から消えた不安定な状態を脱するために「構え」た結果、見られるモノとしての身体を意識するようになるから
- 2 身体が自分の視野から消え、観察者の目に映った姿を定着させるために「構え」た結果、前にも増して自分の身体があらわになるから
- 3 自分の目で身体が見えなくなると、外部からの観察者を想定して自分の姿を捉とらえることになり、身体がより強く意識されるから
- 4 自分の視野が遮おさえられ周囲の世界との距離感が失われた結果、「構え」た身体感覚だけが、自己の存在を実感させるようになるから

問2 傍線部②の説明として、適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- 1 外側から観察されるものでなくその場に「在る」ものとして、内側に確固として存在すること
- 2 「定かでないからだ」としての自分の存在」を強く自覚し、自らの中心を内側から組織しなおすこと
- 3 浮遊する身体感覚を支えるため、内側に集積した力で自らの外部空間に押し返すこと
- 4 受動態ではなく能動的な存在として、外部空間に対して積極的に防御すること

問3 傍線部③はどのようなことか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 衣服や建築デザインは、人間の被膜や防御の囲いとして、不安定なからだを守ることに
- 2 衣服や建築は、そこにある身体そのものを軸として、様々な身体空間を演出すること
- 3 衣服や建築は、からだと密接に結びつき連動することによって、からだの構造にあった物を作ることに
- 4 衣服や建築のデザインに重要なのは、空間と身体の間隔関係のバランスを崩さないこと

問4 傍線部④の理由として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 衣服からのぞくボディが、文化という次元に昇華されたから
- 2 衣服からのぞくボディが、文化の中でイメージに還元されたから
- 3 衣服からのぞくボディが、衣服という装置により、新しい意味を獲得したから
- 4 衣服からのぞくボディが、秘密の内部として、かえって無防備になったから

問5 傍線部⑤はどのようなことか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 自分達の文化に即したイメージへと還元すること
- 2 見方を変えることで、新たな世界を構築すること
- 3 衣服が「第二の皮膚」と見なされるようになったこと
- 4 自然を模倣し、自然の中にあつて拮抗すること

問6 傍線部⑥のように言う理由として、適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- 1 自然の生態系は本来厳しいものであり、人間に都合のいい穏やかなイメージに置き換えてはいけなから
- 2 人間の自然（本性）は、本来の自然とはほとんど共生し得ない忌まわしいものであるから
- 3 人工的なイメージのオブラート越しでは、真の人間と自然環境の相互関係は捉えられないから
- 4 エコ・ファッションなどの皮相なエコロジーは、我々の文化の中でしか通用しないから

問7 空欄Aに入れるものとして、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 世界の外部
- 2 世界の果て
- 3 異様な世界
- 4 セレブな世界

問8 傍線部⑦の理由として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 身体の内外の全感覚の働きの、人を世界の外部、宇宙へと連れだそうとする技法であったから
- 2 変身によるエクスタシー、呪術的な恍惚や陶酔に身を委ねることが、宇宙に向けて身を開く技法であったから
- 3 自分とは別の存在である鳥や獣や霊への変身を通して、宇宙を解釈しようとする技法であったから
- 4 自然を模倣したナチュラルメイクによって自然の一部と化し、さらに超自然的な宇宙と融合する技法であったから

問9 空欄 B に入れるものとして、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 同質の感情表現
- 2 異質のエクスタティックな技術
- 3 異質の身体文化
- 4 同質の身体パフォーマンス

問10 傍線部Aの質問の答えとして、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 自己を自己自身からできるだけ遠ざけるため、非日常の〈異形〉の装いを身につける点において
- 2 人とともにこの世界の内部に深く入っていくため、僧衣と同様に制服の典型である点において
- 3 日常性を超えるものに身を委ね回路を開き変身することで、世界と一体化する点において
- 4 意識よりも身体的全感覚をとおして、自己を自己から遠ざける技法を実現する点において

(以下余白)

4

出典：三浦雅士
『よみがえった身体の呪術』
大東文化大学 全学部

制限時間 20 分
解答・解説DVD — Disk 3

【偏差値換算表】

50 点	—	偏差値 60
44 点	—	偏差値 55
★40 点	—	偏差値 50
36 点	—	偏差値 45
32 点	—	偏差値 40

(★マークは合格ライン)

【四】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

耳にピアスをしている若者が目につくようになって久しい。以前は女性でさえイヤリングはしてもピアッシングまではしなかったものだが、最近はピアスをしている男性が少しもめずらしくなくなってしまった。耳だけではない。ときには鼻や舌などにしていて、一瞬 **a** ことがある。

髪にしてもそうだ。たんに脱色したり色を染めたりするだけではなく、固めたり、削り上げたりと、さまざまな加工をしている。目につかない部分でも、若者たちはずいぶんいろいろなことをしているらしい。

一昔前ならば、なんと野蛮なことを、と **b** に違いない。親に与えられた身体をことさらに傷つけることは不^あキン慎^あなことなのだ。だが、さらにその前を考えると、**c** ことになる。つい二百年ほど前でさえ、男性は月代^{さかやき}を剃^そっていたし、嫁いだ女性はお歯黒をしていた。眉を削ることもめずらしくはなかったのである。

d は日本に限らない。中国にはつい百年ほど前まで辮^{べんぱつ}髪もあつたし纏^{てんぞく}足もあつた。西洋にしたって同じだ。三百年ほど前には、たとえば女性は額を大きく削り上げていたのである。コルセット **e** 今世紀初頭まで残っていた。身体を傷つけないことこそ文明であると見なされるようになったのは、つい最近の出来事にすぎなかったわけである。おそらく、十八世紀の啓蒙主義以降のことと言って大過ないだろう。① その段階で文明に関する考え方が大きく変わったのだ。

いうまでもなく、動物は自分の身体を傷つけない。ただ人間だけが傷つけるのだ。とすれば身体加工こそ人間の特徴、すなわち文明であるということになる。ピアスをしたり、毛髪を特殊なかたちにしたりする若者は、したがってきわめて人間的であり、文明的であるということになる。ちよつとした逆説だが、^い熟^{じゆく}コウ^{こう}に値する。

刺^{いれずみ}青でも抜^ぬ歯^ばでもいい。人間が人間になったのは、明らかに自分の身を傷つけることによってである。それではなぜ人間は自分の身体を加工するようになったのか。② 自分が自分であることを確かめたいため、社会における自分の位置を明らかにしたいためだ。とすれば、人間は自分が自分であることを確かめずにはいられない存在なのだということになる。逆に言えば、人間は、

確認しないかぎり、自分が自分ではない存在なのだ。

これはとても興味深い事実だ。(Ⅰ)なぜならそれは、^③人間はじつは何にでもなれる存在だということだからである。狐にでも狼にでもなれる存在、木にでも石にでもなれる存在だということだからだ。(Ⅱ)実際、^④憑依現象は人間の文化と切り離しがたく結びついている。

憑依現象といえば、まるで未開や野蛮の典型のように響く。(Ⅲ)むしろ文明の^⑤発タンなのである。類人猿に憑依現象はない。人間は、巨大集団を形成することによって他の動物には見られない力を発揮してきたが、それが可能になったのはこの憑依現象によってなのだ。宗教や芸術の^⑥キ源にしても同じことだ。

自分が自分であることを知るには、他人にならなければならぬ。(Ⅳ)人間の自己意識の仕組みは、そのまま社会の仕組みに重なっているのである。人間の社会が類人猿の社会から飛躍したのはこの仕組みによってなのだ。(Ⅴ)自己とは小さな憑依現象であり、社会とは大きな憑依現象である。だからこそ人間は、憑依現象の一形式としての演劇を發明したのである。難しいことではない。要は、人間は何にでもなれるということにすぎない。けれど、この自由はそのまま不安をも意味している。身体加工は、何にでもなってしまうかねない自分というものを、あるひとつの何かに固定する技術として成立したのである。とすれば、いま若者たちが自身の身体を加工することに熱中していることの背後にも、同じ不安が潜んでいると考えるべきだろう。問いはしたがって、若者たちに向けられるよりは、身体加工をしなくなった人間たちに向けられるべきなのだ。なぜ人間は二百年ほど不安を感じなくなったのか、と。

身体加工は啓蒙主義の頃から^⑦スタレはじめた。おそらくその頃から、自分は人間であると信じるだけで、不安がある程度は解消されるようになったのである。人間は生まれたままの姿こそっとも美しい。これが人間主義すなわちヒューマニズムの時代の標語だった。だがおそらくいまや、自分が人間であるといった程度のことでは不安が解消されなくなってしまったのだ。科学技術の驚異的な発展とともに、^⑧人間はついに自分たちの不気味さに本格的に気づきはじめてたとも言おうか。

膨大な情報の洪水のなかに溺れながら、いま人間はふたたび、原始時代と同じ不安にさいなまれはじめてるように思われる。

(三浦雅士『よみがえった身体の呪術』《一九九七年二月一六日「毎日新聞」》による)

問1 問題文中には、次の一文が抜けているが、どこに入るか。最も適当なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。
だが、そんなことはない。

- ア (I) イ (II) ウ (III) エ (IV) オ (V)

問2 空欄 a～e を埋めるのに、それぞれ最も適当なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|-----------|------------|-----------|-------------|---------|
| a | ア たじろぐ | イ うごめく | ウ はなやぐ | エ よろめく | オ ときめく |
| b | ア 恥をかかされた | イ 説明を求められた | ウ 響聲を買った | エ 感嘆の声が挙がった | オ 投書された |
| c | ア 神妙な | イ 珍妙な | ウ 巧妙な | エ 靈妙な | オ 微妙な |
| d | ア あれ | イ つぎ | ウ こと | エ もの | オ ほど |
| e | ア にいたっては | イ を除いては | ウ に限らなければ | エ を加えれば | オ によっては |

問3 傍線部①「その段階で文明に関する考え方が大きく変わったのだ」とあるが、「考え方」がどう変わったのか。その説明として、最も適当なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 身体加工に積極的な役割を与えて人間の文明をさらに発展させるべきだという考え方が、野蛮な身体加工からの脱却こそが文明だという考え方に変わった。

イ 野蛮な身体加工をやめて身体をあるがままに維持することが文明だという考え方が、身体加工こそが人間の文明の証明だという考え方に変わった。

ウ 身体加工は野蛮だが人間にとつての必要悪だという考え方が、身体加工なくして人間の文明はありえない不可欠なものだという考え方に変わった。

エ 人間の生活のなかに身体加工を当然のこととして受け入れていた考え方が、身体加工は野蛮だからそれをやめることが文明であるという考え方に変わった。

オ 身体加工は野蛮だからやめるべきだという考え方が、人間の文明は身体加工によつてこそ獲得できるのだから身体加工を積極的に推進すべきだという考え方に変わった。

問4 傍線部②「自分が自分であることを確かめたい」とあるが、「身体加工」がなぜ「自分が自分であることを確かめるこ

とになるのか。その説明として、最も適当なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 身体加工は、身体加工をしたその人がほかの人とは違っていることを示し、その人がいかに個性的であるかの証明となるので、その人の存在感を高めてくれるから。

イ 身体加工は、それぞれの社会特有の意味づけを帯びているものなので、身体加工をしたその人にはその社会におけるその人自身の位置づけを明らかにしてくれるように感じられるから。

ウ 身体加工は、社会の基準から外れていると他人から非難されるが、身体加工をしたその人がそれを教訓にして生活態度を改めれば、それ以後は安定した人生を送れるようになるから。

エ 身体加工は、身体加工をしたその人の、社会における位置づけが普通の人とは異なることを示すので、その人自身にとつては自分が他人より優越しているように感じられて、心が落ち着くから。

オ 身体加工は、近代社会の安定した道徳観やものの考え方などに對抗して、原始時代の世界観を提示するものでもあるので、身体加工をしたその人に根源的で力強い生命力を与えてくれるから。

問5 傍線部③「人間はじつは何にでもなれる存在だ」とあるが、どういうことか。その説明として、最も適当なものを、次の

ア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間は、もともと自然と密着して生きていたので、自然界のさまざまなものを生活にとり入れて、それに同化することに不自然さを感じない存在である、ということ。

イ 人間は、空想や幻想の世界に遊ぶ能力を持っているが、その度が過ぎると、自分が何にでも変身できると思いこんで、振る舞いまでが変化してしまう存在である、ということ。

ウ 人間は、想像力を介して自分以外のものを演じ、自分自身がそれであるかのように生きることのできる存在である、ということ。

エ 人間が生きているということは、社会の中でさまざまな役割を引き受けてそれを演じていくことなので、人間は演技する能力を身につけることによって初めて自由になれる存在である、ということ。

オ 人間の中には、生まれつきほかの人にはない、自然界の精霊と交流する特殊な能力に恵まれている人がおり、そういう人は自在に変身ができる、ということ。

問6 傍線部④「人間はついに自分たちの不気味さに本格的に気づきはじめた」とあるが、どういうことか。その説明として、

最も適当なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間の不安は人間主義の登場によって一度は解消されたが、科学技術が発展しすぎていずれば人類に破滅がもたらされ、原始時代に戻ってしまうのではないかという新たな不安が見えはじめた、ということ。

イ 科学技術の高度化により、人間というものは、原始時代はもちろん、人間主義が登場した時代でも、また現在でも未来でも、常に不安を抱えて生きていく存在だということが明らかになりはじめた、ということ。

ウ 原始時代の不安感は、人間主義の登場や科学技術の進歩によって克服されたが、一方で、科学の未発達な時代の人間がもっていた生命力を弱めたので、科学技術の進歩への新たな不安が生じはじめた、ということ。

エ 人間が原始時代以来抱えていた不安は、人間主義の登場によって克服されたかのように見えたが、現代では、科学技術の高度な発展とともに、人間存在の、えたいの知れない新たな不安が顔を見せはじめた、ということ。

オ 原始時代の人々は、変化のない安定した生活を送っていたので不安の本身は単純なものだったが、現代では社会の自由度が増したために、自由を失うのを恐れるという新たな不安が広がりはじめた、ということ。

問7 傍線部あゝおのカタカナに当たる漢字として、それぞれ最も適当なものはどれか。次のア～オの中から選び、記号で答え

なさい。

あ キン慎

ア 欣 イ 僅 ウ 禁 エ 緊 オ 謹

い 熟コウ

ア 校 イ 耕 ウ 考 エ 稿 オ 興

う 発タン

ア 探 イ 端 ウ 担 エ 旦 オ 短

え キ源

ア 機 イ 紀 ウ 期 エ 帰 オ 起

お スタれ

ア 廃 イ 棄 ウ 毀 エ 除 オ 滅

(以下余白)

5

出典：柏木博の文章による

甲南大学 文・経済学部（一部改編）

制限時間 25 分

解答・解説DVD — Disk 3

【偏差値換算表】

50 点	—	偏差値 60
★ 43 点	—	偏差値 55
36 点	—	偏差値 50
29 点	—	偏差値 40
22 点	—	偏差値 30

(★マークは合格ライン)

【五】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

日本の住まいでは、風を遮断しながらも、いつでもそれを取り込めるような装置を、格子や襖ふすまや明障子あかりしょうじのほかにも、さまざまなデザインで実現してきた。季節によっては空気の流れは、好ましいものとして楽しまれてきたのである。だから、わずかな空気の流れをも捉とらえて音に変換する装置としての風鈴が楽しまれました。

日本の住まいにおけるしきりが、頑強に自然環境からの遮断によって人工性を主張するのではなく、自然環境を取り込むようなしきりとなったのは、日本の自然環境が人間にとつてさほど厳しいものではなかったからなのかもしれない。鳥や虫の声、雨や風の音をけつして排除するのではなく、むしろ好ましいと思う感覚も、^①そうしたしきり方と結びついているように思える。自然環境を強固に遮断することはしなかった、そうした住まいに生活したがゆえに、人間の関係つまり社会的関係性もきわめて微妙にまた曖昧にしきる意識が形成されたのではないか。そこには^②近代的なプライバシー意識とは異なった、他者とわたしの関係が存在した。

ものや装置によって、わたしたちの感覚や意識が形成されたのか、逆にわたしたちの感覚や意識によってものや装置のあり方が生まれたのか。それはどちらもありうる。いずれにせよ、ものや装置とわたしたちの感覚や意識のあり方は深くかかわっていることは否定しえない。

衝立や几帳あるいは襖のように垂直に、つまり壁状になるしきりは、空間を切断し空気の流れを調節しまた視線を遮るはつきりとしたしきりとして認識することができる。しかし、わたしたちの住まいには、そのようなはつきりとした空間をしきる装置としては見えないのだが、空間をしきっているものがいくつもある。そのしきりは、壁状のしきりよりもさらに文化的そして社会的しきりとして機能しているといえるだろう。たとえば、板の間と畳の座敷の違いは、素材によるしきりによっている。そして、そのしきりは空間の格を差異づけている。入り口ちかくと奥の距離も同様である。

建築史家の鈴木博之さんにうかがった面白いエピソードがある。鈴木さんは、ハーバード大学で日本の建築についての講義を

し、学生たちを実習体験のためポストン美術館に設えられた日本の部屋に連れて行ったところ、部屋からはるかに離れた場所で靴を脱いでしまう学生や、室内に入り込んで靴を脱ぐ学生までさまざまだったというのだ。日本の住まいでは靴を脱ぐののだということを知ってはいても、ではどこが靴を脱ぐしきりになっているのか、そのしきりがわからないのである。

よく似た事態をわたしも見たことがある。一九八〇年代のはじめ、フランスの社会学者のジャン・ボードリヤールを東京に招き、連続シンポジウムを行った。シンポジウムの終わった日の夕刻、どこかで参加者がボードリヤールを囲んで食事をしたというところで、わたしが新宿の豚カツ屋を予約した。この店は、奥が畳の座敷になっており、手前が椅子式になっていた。ボードリヤールを座敷に座らせ、参加者の多くは椅子についた。時間が経ちボードリヤールが、先にホテルに帰るということで、全員で見送った。ところが、ドアを出てすぐにボードリヤールはもどってきた。靴を履かないまま道路に出てしまったのである。

③ 座敷に上がるところで靴を脱がされたことを忘れてしまったのである。

こうしたしきりは、大雑把おおざっぱに言えば、意識や感覚の面における内と外とのしきりとなっているといえるだろう。文化的あるいは社会的なしきりが理解されていないと、この内と外のしきりが認識できないのである。

わたしたちは、物質的にも非物質的にも、さまざまな場面で内と外とをへだてる壁をつくっている。そしてその壁の外に出て行ったり再び戻って内に入ったりということを繰り返している。壁は個人や家族や集団や組織によってそれぞれ設けられている。

④ この壁の存在によって、自己が自己として認識されている。また、時として壁の内側に他者を入れたりもする。住宅においては、その壁の内と外をつないでいる空間が玄関ということになるだろう。したがって、玄関には精神的にも物質的にも外と内を調整する空間としての意味があるといえる。今日、玄関というと、わたしたちは、ある程度、共通した形式をもった空間を想起する。しかし、ほんの少し以前まで住宅の出入り口は、玄関という形式だけにはかぎられていなかった。

いまではなくなってしまうけれど、一九六〇年代に「学生村」というのがあった。これは、どこか特定の場所にあるというのではなく、東京近郊であれば山梨県や長野県などで、夏の期間だけ、学生を受け入れる村のことをそう呼んでいた。いわば、農家が割安の宿泊施設を営業したのである。現在の「ペンション」のようなきれいな施設ではないが、経営者の住まいが宿泊

施設になっているという点では、形式としてはペンションである。その学生村の農家に一度だけ友人たちと行った経験がある。ほんの数日だけだが、比較的古い農家で生活することのできた貴重な体験だった。

農家が都市部の住宅と決定的に異なっていたのは、日常的な出入りの場所がふたつあったことだ。ひとつは土間から、もうひとつは日当たりのいい南の庭に面した廊下（縁側）からである。土間のつくりは、引き戸を開けるとすぐに土間があり、ここから風呂、勝手、板の間（ダイニングに使っていた）にそれぞれ行けるようになっていたように記憶する。したがって、玄関らしい玄関というのはなかった。とはいっても、現在では、Xの総称として「玄関」という言葉を使っているので、こうした場所も玄関と叫ぶにいいのだろう。さらにいえば、庭に面した廊下から出入りするという形式は、かつての寝殿造りの住まいが使っていた形式である。したがって、日本ではこの形式はかなり古く伝統としてあったといっている。

出入り口の形式としての「玄関」という空間は、かなり長い時間をかけて形成された日本に特有な空間のようだ。日本の玄関のような空間は欧米にはない。

寝殿造りの住宅では、出入り口はいくつかあり、もつとも重要なのは寝殿の正面に付けられている階段部分ということになる。ここには牛車や輿などがつけられ、この住まいの主人が使う出入り口になる。他は住居の東西にある中門廊の先についている戸口で、これは東西にあるので二カ所ということになる。普通の訪問者は道路に面した中門廊の戸口を使うことになる。もちろん、使用人たちは他の出入り口を使っていた。中門廊の戸口（妻戸）は階段ではなく、履き物を脱ぐ板が置かれている。時として、ここに腰掛けて客と対応したりもする。鎌倉時代には妻戸は廊の側面になり唐破風が軒に付けられる。これは車寄と呼ばれることになる。

室町後期の武家住宅では中門廊はなくなり車寄が正しい出入り口となる。こうした出入り口のデザインはやがて一六二七年に改築された二条城の二の丸の式台付きの土間を持った出入り口のデザインに進化したとも考えられる。これが玄関と呼ばれたかどうかはわからないが、これは禅宗寺院の方丈の玄関のデザインと似ている。そして武家住宅では出入り口に式台付きの土間をつけることが一般化していく。この空間を玄関と呼ぶことになる。さらに、小さな土間を持った区画を出入り口の空間としては

じめるのは、江戸後期から明治にかけてのことである。おそらく、これが、わたしたちが玄関と呼ぶ空間のデザインの原型だろう。このように玄関が形成されると、これは家の格式を示す場所になった。江戸期においては、玄関を持つのは武家屋敷であった。一般の町人たちには玄関を持つことが認められていなかったのである。町のいわば管理を担当する名主には玄関が認められていた。したがって、デザインやものに関する禁制や規制が解かれた明治期に、庶民が玄関を持ちたがるようになったのである。また、玄関を構えることが社会的な地位にかかわることのように考えられるようになった。

こうした格式のイメージを持つが故に、第二次大戦後、玄関という言葉が廃止しようという提案がなされました。現在でも、玄関や玄関のドアのデザインが商品住宅の^⑤付加価値を高めているのは、玄関が格式と結びついたイメージの名残があるからだろう。

(柏木博の文章による)

(注) 式台——上がり口にある低い板敷き

問1 傍線部①「そうしたしきり方」とは、どのようなしきり方か。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 人工的なものを排除して、自然環境を取り込むようにしきる
- 2 厳しい自然環境を遮断し、役立つものだけを取り込むようにしきる
- 3 自然環境を全く遮断するのではなく、いつでも取り込めるようにしきる
- 4 好ましいと思える自然環境を選択し、取り込むようにしきる
- 5 自然環境の中の花鳥風月に着目し、それを取り込むようにしきる

問2 傍線部②「近代的なプライバシー意識とは異なった、他者とわたしの関係」とあるが、その説明として最も適当なものを

次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 自己が絶対的に他者に包み込まれている関係
- 2 自己と他者との距離をできるだけ人工的に調節する関係
- 3 自己は常に内にあり、他者は常に外にあるとする関係
- 4 自己と他者との隔てはあるが、それがさほど明確でない関係
- 5 自己が常に他者の意志によって自由に操作される関係

問3 傍線部③「座敷に上がるところで靴を脱がされたことを忘れてしまった」とあるが、筆者は、ボードリヤールがなぜその

ような事態になったと考えているか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 ボードリヤールは、日本の畳の座敷が、椅子式の席という西洋的な様式に包摂されているように感じた
- 2 ボードリヤールは、外と内とをしきる玄関の機能は理解していたが、日本にすることを忘れていた
- 3 ボードリヤールは、意識や感覚の上でのしきりを念頭に置き、文化的、社会的視点に配慮していた
- 4 ボードリヤールは、日本文化に関心をいだき、靴を脱ぐという日本の文化になじみ過ぎていた
- 5 ボードリヤールは、椅子式の席と座敷の間にある、一見したのでは分かりにくい文化的なしきりを認識しなかった

問4 傍線部④「この壁の存在によって、自己が自己として認識されている」とあるが、その説明として最も適当なものを次の

中から選び、記号で答えなさい。

- 1 社会と自己、家族と自己などの間のしきりが越えられないものとして自覚される
- 2 自己が他者という壁に突き当たることにより、自立への道が定まる
- 3 文化的、社会的なさまざまなしきりによって、他とは違う自己が見出だされる

- 4 集団や組織などの壁を成立させた偶然の事情が、個人としての自己を形成する
- 5 出入り可能な文化的しきりを通過する時に、自己の確立がなされる

問5 空白部 を埋めるのに適当な語を文中から抜き出してそのままの形で記せ。ただし、五字以内とし、句読点等は字数に算入しないものとする。

問6 傍線部⑤「付加価値を高めている」とあるが、この文脈ではどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 実際の価格以上に高価に見せようとしている
- 2 商品ではあるが芸術性を兼ねそなえている
- 3 実用性以外に社会的な地位を暗示する要素を持っている
- 4 庶民が潜在的に持つ中流志向にうったえようとしている
- 5 デザインの善し悪しが商品価値を左右する

問7 本文の内容に合致しないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- 1 古い農家には昔の寝殿造りの入り口と共通する入り口がある
- 2 室町後期の武家住宅とそれ以前の寝殿造りとは、正式な入り口という点で変化が見られる
- 3 禅宗寺院の玄関は現在の玄関と全く関連はない
- 4 玄関らしい玄関の原型は江戸後期以降に生まれた
- 5 几帳や襖という「装置」によって、日本人の感覚や意識が形成された可能性がある

(以下余白)

一 外山滋比古『日本語の論理』

問 1	①																																		
問 2																																			
問 3	A	B	C																																
問 4																																			
問 5																																			
問 6																																			
問 7																																			
問 8	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18																	
																			19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35

二 丸山真男・加藤周一『翻訳と日本の近代』

問 1		6 点																	
問 2																			8 点
問 3			6 点 × 2																
問 4			6 点 × 2																
問 5			6 点 × 2																

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

/50

三

寶田清一『てつがくを着て、まちを歩こう』

問 1																					
問 2																					
問 3																					
問 4																					
問 5																					
問 6																					
問 7																					
問 8																					
問 9																					
問 10																					

5点
5点
5点
5点
5点
5点
5点
5点
5点
5点
5点

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

四

三浦雅士『よみがえった身体の呪術』

問 1		6 点																		
問 2	a		b		c		d		e											
問 3		6 点																		
問 4		6 点																		
問 5		6 点																		
問 6		6 点																		
問 7	あ		い		う		え		お											

2 点 × 5

2 点 × 5

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

五 柏木博の文章による

問 1		7 点
問 2		7 点
問 3		7 点
問 4		7 点
問 5		8 点
問 6		7 点
問 7		7 点

--	--	--	--	--	--	--	--

板野博行の 夏期講習DVD 現代文・応用編

— 付属テキスト —

- 【一】 河合隼雄『大人の友情』
～ 日本女子大学 家政学部
- 【二】 正高信男『子どもはことばをからだで覚える』
～ 立教大学 経済学部
- 【三】 中村雄二郎『問題群』
～ 首都大学東京 都市教養学部
- 【四】 鷺田清一『普通をだれも教えてくれない』
～ 広島大学 文・教育学部
- 【五】 夏目漱石『思い出す事など』
～ 青山学院大学 文学部

『板野の入試国語DVD講座』のご案内

この度は『板野の入試国語DVD講座』をお買い上げいただき誠にありがとうございます。この教材で学習を始める前に、以下の点についてのご確認をお願いします。

■ 学習方法に関して

まずは Disk 1 に収録されている「ガイダンス」を見ましょう。この教材の学習目的から夏の勉強計画、効果的な学習法などを解説しています。

このガイダンスで、入試本番までの全体を見渡す広い視野と、この夏における到達目標をしっかりと持つことが大切です。

そして付属テキストに掲載されている問題を解きましょう。

この夏期講習の教材では、制限時間を意識して解くよりも、1問1問をしっかりと考えて解くということを心掛けて下さい。演習の中で解らない単語や語句などがあれば、解説授業を見る前に辞書などで調べておくとう良いでしょう。

問題を解き終えたら、該当する「解答・解説授業」にて板野先生による解説授業をご覧ください。授業では大事なポイントを板書していきますので、書き写すノートもご用意下さい。

1度授業を見終えても、時間をおいて再度復習を重ねましょう。さらなる理解が深まります。知識や解法がしっかりマスターできるまで、繰り返し学習することが合格への近道です。

■ サポートに関して

DVD 授業の中での解らない点については、メールによる質問・相談サポートを行っております。

ご質問は「イエジューク」(<http://iejuku.jp/>)内の「サポート」ページよりお問い合わせ下さい。

サポートフォームの「件名」欄に 該当の商品名、「お問い合わせ内容」欄に 質問の内容 を詳しくご記入下さい。

いただいたご質問への回答は、メールにて行いますので、メールアドレスの入力はお間違えないようお願いいたします。また、@iejuku.jp ドメインからのメールを受信できるよう各自設定をお願いいたします。



1

出典：河合隼雄

『大人の友情』

日本女子大学 家政学部

制限時間 25 分

解答・解説DVD — Disk 1

【偏差値換算表】

50 点	—	偏差値 70
48 点	—	偏差値 65
★40 点	—	偏差値 60
34 点	—	偏差値 55
27 点	—	偏差値 50
25 点	—	偏差値 45

(★マークは合格ライン)

【一】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

友だちが欲しいのだが友だちができない。あるいは、せつかく友だちができたと思ったのに、すぐうまくゆかなくなった、という悩みは、割によく聞かされる。大学の学生相談や、小、中、高の学校におけるカウンセリングで、比較的よく持ちこまれてくる相談内容である。

ある大学で、入学後一週間もしないうちに相談に来た学生が、「どうしても友だちができないので困っている。どうしたら友だちができるか教えて欲しい」と言ったので、カウンセラーもびくりしてしまった、という話を聞いた。その学生によると「一生懸命努力したのだが、どうもうまくゆかない」とのことだが、何より驚くのは、一週間努力すれば友人ができると思っていることである。

この大学生は、友人というのをどのような人だと思っているのだろう。むしろ、欲しいと思っても、^①なかなかできないのが「友人」だ、とも言えるのではなからうか。これに対して、この学生は、「欲しいと思ったものは、すぐ手に入るはずだ」、「それには、何かよい方法があるはずだ」と思っている節がある。だから、相談すれば、よい「答」がもらえると考えるのだろう。しかし、世の中はそれほど簡単ではない。特に「友人」に関しては。

と偉そうなことを言ったが、じゃあ、「お前は、友人というのはどんな人のことを言うのか」と正面切って訊かれると、ちゃんと答えられるだろうか。それに、われわれは、「ほんとうの友人」などとわざわざ「ほんとうの」という形容詞をつけたりする。とすると、友人にも、ほんものにとせものがあるならば、ほんものにとせものとの見分けは、どこでしているのか、ということにもなってくる。こうなると、あんがい難しい。

こんなとき、私はかつて、ユング派の分析家、アドルフ・グッゲンビュールの「友情」についての講義を聞いたときのことを思い出す。そのとき、彼は若いときに自分の祖父に「友情」について尋ねてみたら、祖父は、友人とは、「夜中の十二時に、自動車のトランクに死体をいれて持ってきて、どうしようかと言ったとき、黙って話に乗ってくれる人だ」と答えた、というエピソード

ソードを披露してくれた。

これは極めて具体的にわかりやすい。この具体的な例は、いつどんなことがあっても、と一般化できるし、もう少し具体性を持たせて、「どんな悪いことをしたとしても」と言えるかもしれない。ここで、「かくまってくれる」と言わず「話に乗ってくれる」と言っているところが注目すべきところだ。しかし、わざわざ「黙って」とつけ足しているのは、疑ったり、怒ったりせず、ともかく無条件に話に乗ろう、ということだ。つまり、深い信頼関係で結ばれているし、話に乗って何とかしよう、という姿勢も感じられる。

確かにこれは素晴らしい、「究極の友人」ということにもなるだろう。現実にはそこまではいかないにしても、もう少し広い意味で、お互いにある程度考えはわかっているし、共通の興味や関心事があり、会って話し合うのは楽しい、という程度のももあるだろう。このような広い意味、^②狭い意味の両方を心に留めながら考えてゆくことにしよう。

日本では昔から、人間関係を表現するのに、「A」が合う、「虫が好かぬ」という面白い言い方がある。「どうも、あいつは虫の好かんやつだ」と言ったりするが、これらの表現の注目すべきところは、主語は「A」、「虫」と人間でないものになっているところである。自分が好きになろうといくら努力しても「虫」が好かないのだから、どうしようもない、という感じや、別に努力しているわけでもないが「A」が合うのだから、うまくゆくのだ、という感じがよく出ている。

これと類似の表現が外国にあるかどうか、私は知らない。ご存知の方があれば是非教えていただきたいが、^③英語にはないと思う。キリスト教文化圏では、人間の感情を表現するのに、人間以外の生物を主語にすることは、まずないだろうと思う。

カウンセリングの場面で、「虫が好かない」話を聞くことは多い。新人社員があまりにもイケ好かないので、「腹の虫がおさまらず、会社をやめようかと思う」という相談で、仕事のよくできる女性の中堅社員が来談した。ともかく「虫が好かない」ので、何でもかんでも腹が立つ、というのだが、「まあ、そう言わずに、腹が立つのはどんなことか、具体的に話をしただけませんか」と言うと、「彼女は職場にほんとうに仕事をする気でないと思う」というのはじまって、服装からアクセサリから、歩き方から、ことごとく嫌だ、というのである。

こんなときに、一番大切なことは、その話に耳を傾けて聴くことである。こちらが熱心に聴いていると、話をする方にも熱が入ってあれこれ話すのだが、そうすると話し手の方が、話しながら^④新しい事実が気がつくのである。あるいは、話の内容が自然に変わってくることもある。

この場合は、新入社員の悪口ばかり言っていた人が、急に、「私も仕事、仕事、で熱心をやってきたのですが……」と言って、ふと黙ったりする。こんなときも、カウンセラーは、その話に耳を傾けて、ちゃんと受けとめて聴く。そんな会話を続けているうちに、この人は、自分は「仕事をする人は善」、「遊ぶのは悪」などとあまりにも決めつけて生きてきたのだが、やっぱり人生にはどちらも大切で、新入社員の若い子は、その辺を上手にバランスよくやっているのではないだろうか、ということを言いはじめた。

人間の生き方は、何らかの意味でどこか一面的なところがある。そのとき、自分が無視してきた半面を生きてきた人を見ると、「虫が好かぬ」と思うときがあるようだ。ここに、わざわざ「ときがあるようだ」などという表現をしているのは、いつもそうだとはいえないからである。

キリスト教文化圏では、おそらく「虫」を主語にして、自分の気持を語ることはないだろう、と言ったが、これは、やはり人間は他の動物とは異なるし、主体的な意味をもって生きていると考えるからだろう。しかし、そうは言っても、人間の意識はそれほどしつかりとした主体性を持っているだろうか、と二十世紀になってから、フロイトやユングなどの深層心理学者たちが言いはじめ、今日では、一般にもよく知られているように、「無意識」の重要性が論じられるようになった。人間の意識は思いのほかは無意識によって影響されている、とこれらの人は主張する。

日本語の表現の「虫が好かぬ」、「虫の知らせ」、「腹の虫がおさまらぬ」などという、「虫」を「無意識」のことと思うと面白いのではないだろうか。「虫が好かぬ」ときは、「俺の無意識はどうなっているのかな」などと思うと、新しい発見があったり、「虫の好かぬ」相手のいいところが見えてきて、友人になったりする。「虫」の分析を通じて己を知るのである。

(河合隼雄『大人の友情』による)

問1 傍線部①「なかなかできないのが「友人」だ」とあるが、筆者はなぜそのように考えているのか。筆者の考えともっとも合致しているものを、次の1～5から選んで、番号で答えなさい。

- 1 友人を得るには、一週間では無理で半年から一年はかかるから。
- 2 友人を得るには、己の「虫」が好く相手を探す必要があるから。
- 3 友人を得るには、まず自分のことを知らなければならないから。
- 4 友人を得るには、共通の興味や関心事がなければならぬから。
- 5 友人を得るには、大学以前の小、中、高の頃が適しているから。

問2 傍線部②「狭い意味」の友人とは、どのような存在であると筆者は捉えているのか。本文中の語句を用いて三十字以内で答えなさい（句読点を含む）。

問3 空欄 A に、適切な語を漢字一字で入れなさい。

問4 傍線部③「英語にはないと思う」とあるが、筆者はなぜそのように思っているのか。筆者の考えともっとも合致しているものを、次の1～5から選んで、番号で答えなさい。

- 1 筆者は、キリスト教文化圏では人間は格別高貴な存在と捉えられている、と思っているから。
- 2 筆者は、キリスト教文化圏では人間は主体的に生きると考えられている、と思っているから。
- 3 筆者は、キリスト教文化圏では近年、無意識の重要性が認識され始めた、と思っているから。
- 4 筆者は、キリスト教文化圏ではフロイトなどの深層心理学が盛んである、と思っているから。
- 5 筆者は、キリスト教文化圏では人間の感情を巧みに表現する歴史がある、と思っているから。

問5 カウンセリングで、もっとも大切なことは、どのようなことか。本文から考えられることを、本文中の語句を用いて十五字以内で答えなさい（句読点を含む）。

問6 傍線部④「新しい事実気がつく」とあるが、気がついた「事実」としてもっとも適当なものを、次の1～5から選んで、番号で答えなさい。

- 1 バランスよく仕事をしないで遊ぶ人は、悪であると再認識すること。
- 2 自分が意識的に無視してきた半面を、より一層的確に再認識すること。
- 3 仕事をする人は善と信じて生きてきた自分の正しさを、再認識すること。
- 4 人間の生き方は、どこか一面的にならざるを得ないことを再認識すること。
- 5 自分の生き方の中の無意識的側面に気づき、己自身について再認識すること。

2

出典：正高信男
『子どもはことばをからだで覚える』
立教大学 経済学部

制限時間 25 分
解答・解説DVD — Disk 2

【偏差値換算表】

50 点 — 偏差値 70
★ 46 点 — 偏差値 65
42 点 — 偏差値 60
38 点 — 偏差値 55
34 点 — 偏差値 50

(★マークは合格ライン)

【二】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

私がとりくんだテーマは、子どもが、日本語の動詞の「行く」と「来る」の適切な使い分けを、いつどのように習得するかという問題であった。行く (go) / 来る (come) といった動詞が会話中で用いられる場合、語の意味は、動作の方向の基準となる準拠点をどこにとるかによって決定的に左右される。

「リンゴ」や「机」や「犬」といった語彙においては、指示対象は準拠点に依存して意味が変化することはない。これとはまったく正反対なのが、私とかあなたといった語で、指示する対象は話し手の変化によって必ず転移し、かつ発話時の話者に100パーセント依存する。他方、動詞、とくに運動を表す動詞のなかには、意味を規定する際に準拠点が導入されるものの、その準拠点の設定が通常の語より a である語彙がしばしば存在する。それが、来る / 行くといった動詞の類である。ほかには、あげる / もらう、売る / 買うなどがよく知られている。日本では、俗に視点動詞あるいは移動動詞と表現されることが多いらしい。そして一般に、こうした動詞の適切な使い分けの習得は、言語習得のなかでもたいへんむずかしい部類に属するといわれている。話者の設定した準拠点を適切に「ハイク」し、それに即して聞き手が今度は自分の側から正しい視点動詞（移動動詞）を使うことが求められるからである。日本語の行く / 来るの場合、小学校に入ったあとでもまだ誤用が多いという説はよく耳にする。また母語の習得にとどまらず、第二言語習得に際しても困難をきわめると信じられている。

ところが非常に驚くべきことに、むずかしいことが周知の事実として通用しているにもかかわらず、その問題を体系だつてツィセキした調査となると、皆無にひとしい。英語圏では若干の研究があるものの、日本では皆無であるといっている。とりあえず、小学校低学年でどの程度に使えるのかを知る必要があると思ひ、自分で調査を行うことにした。

b に二人の人物が会話をかわしている状況を想像してみよう。

「きょう、遊びに来る？」と一方が尋ねたならば、他方は「うん、遊びに行く」あるいは「いや、きょうは遊びに行かない」というふうな、相手がこちらに「来る」と尋ねたなら「行く」で答え、^(注) 反対に「行く」で尋ねられると、「来る」で応じないと、

正しい文とはならないはずである。これが子どもにはなかなかむずかしいとされている。けれども、俗説としては、^b流布しているものの、資料はないのだ。

何はともあれ、小学校一年生二〇〇名（男子四八名、女子五二名）を対象に、どれぐらい適切な使い分けができるのかを調査してみることにした。上述のような、「来る」で聞いたら「行く」、「行く」には「来る」で答えて初めてことばとして正しい回答になる問いかけを、同一の実験者が発して、正反応・誤反応のいずれが返ってくるのかを判定してみる。一人について、そういう問いかけを二〇回行う。合計二〇〇〇試行を実施したところ、正答率は全体で五四%であることが判明した。要するに、二度に一度の割合でしか正しく答えられない。

もともと正答率は、個人内でもばらつくことも同時に明らかとなった。つまりおよそ五〇%に近い正答率といってもそれは、一〇〇名中半数が、常に正しい返答をし、残りの半数が誤答を繰り返すことを意味していない。ある問いには正しく答えたが、次にはまちがうというケースがしばしばある。そこで **c** に、二〇試行のうち八割（一六試行）以上で、正しく答えられた生徒を、「適切な使い分けが習得されたグループ」、逆に二割以下の場合を「適切な習得ができていないグループ」と定義することとし、それぞれのカテゴリーに含まれるものの人数を求めたところ、前者は三九名、後者は四五名であることがわかった。残り一六名は中間に分布する。視点動詞の適切な使用法の習得には、やはりかなりの個人差が存在することが明らかとなった。

むろんこの調査は、ある集団を一時期に調査した横断的（cross-sectional）な研究にすぎない。けれども、成人は通常「行く」動詞の習得過程が **d** に遅い集団とみなすのは、決して不当な推論とは思えない。

「行く」と「来る」は、ともに人やものの移動を表す動詞である。ただし話し手が一人称で相手に用いる限り、「行く」は聞き手の存在場所へ主体が向かう移動をさすのに対し、後者が発せられる場合は、その文の **甲** である対象の、**乙** へ向かう移動を意味することとなる。それゆえ「きょう遊びに来る？」と尋ねられたとき、話し手は聞き手が自分の方へと移動してくることを期待しているが、聞き手にすれば自分が相手に向かって移動するかどうかが問われているのだから、「行く」で答ええない

と誤りを犯したことになってしまう。

要は、位置移動をハイクする場合、それが話し手にとって接近であるか距離を置くことになるのかは、自分から見たときと相手から見たときでは状況が逆転するということの理解が、不可欠になるのではと想像されるのである。「行く」「来る」を耳にすると、運動のイメージが、ハ、カンキされることだろう。それを自分の視点にもとづいて、ナマに表明すると「遊びに来る？」に対し、「うん、遊びに来る」と答えてしまうことになる。そこで、相手も同じイメージを共有していることを「サツチし、かつ」^①相手のイメージのなかでは運動の見え方が自分と反転することに思いが及ぶような、心的操作の実行が求められてくるのではないだろうか。この操作は言語とのみ、とくに深いかかわりを持つ心的能力ではない。もっと e な認知能力のひとつであり、しかも発達的には非常に複雑な学習を必要とする、高次な心理作用であると考えられる。

(正高信男『子どもはことばをからだで覚える』による)

(注) 反対に「行く」で尋ねられると——例えば、「きょう、そっちに遊びに行っていない？」と尋ねられた場合などを指す。

問1 傍線部イ、二を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)

問2 傍線部 a・b の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

問3 空欄 a e にはそれぞれどんな言葉を補ったらよいか。次の各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度以上用いてはならない。

- 1 相対的
- 2 具体的
- 3 一般的
- 4 恣意的
- 5 便宜的

問4 本文第二段落で、筆者は日本語の単語を三種類に分けて説明している。本文中の「リンゴ」「机」「犬」と同類のものを1、「私」「あなた」と同類のものを2、「行く」「来る」と同類のものを3として分類すれば、次の各項はどれに属するか。それぞれ番号で答えよ。

- イ 「鍵」^{かぎ} 「鍵穴」 ロ 「服従する」 「支配する」 ハ 「ぼく」「君たち」
ニ 「油」「水」 ホ 「借りる」「貸す」

問5 空欄「甲」・「乙」にはそれぞれどんな言葉を補ったらよいか。次の各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で答えよ。

- 1 話者 2 場所 3 主語 4 述語 5 目的語

問6 傍線部①について、ここで言う「心的操作の実行」とは具体的にはどのようなことか。句読点とも二十字以内で説明せよ。

(以下余白)

3

出典：中村雄二郎

『問題群』

首都大学東京 都市教養学部

制限時間 40 分

解答・解説DVD — Disk 2

【偏差値換算表】

50 点	—	偏差値 75
45 点	—	偏差値 70
42 点	—	偏差値 65
★36 点	—	偏差値 60
33 点	—	偏差値 55
30 点	—	偏差値 50

(★マークは合格ライン)

【三】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

機械ほど、明確に定義づけ難いものはない、と言われる。なぜなら、たとえば、動力と歯車から成る古典的な力学機械を念頭において機械の定義をすると、エレクトロニクスの所産である現代的な情報機械には必ずしも当てはまらず、^① その定義は後者によって簡単に乗り越えられてしまうからである。そして、同じ情報機械のなかでも、さらに次々に新しい分野が開拓されていけば、同様なことが生ずるのは避け難い。こういうことが起きるのは、機械が謎に満ちているためというより、そういう機械を次々に創り出す人間が謎に満ちているためであろう。

もつとも、^② そういうかたちで問題を閉ざすべきではなく、ここで問われるべきは、機械と人間との関係、つまりは〈技術〉とはなにか、である。ただし、技術では当然、人間と機械との相互性が立ち入って考えられねばならないから、必然的に問題はいつそう複雑になる。暫く前から《マン・マシン・インターフェース（界面）》というようなことが唱えられてきているが、それは現在、人間と機械との関係があらためて問われざるを得なくなってきたことを示している。〈技術〉はおそらく、哲学にとつて最大の難問の一つであろう。とはいえ、それは、原子力やエレクトロニクスはもとより、生命工学や臓器移植を含む問題に関わり、現在きわめて^アセツジツなテーマである。

ところで、哲学や科学に対して〈技術〉の問題は、象徴的に言うなら、頭（脳）に対する〈手〉の問題である。面白いことに、手については、昔から哲学者たちによっていろいろなことが言われて来ている。たとえば、《人間は手を持っているがゆえに、動物のうちでもっとも賢い》（アナクサゴラス）とも言われれば、逆に《人間は動物のうちでもっとも賢いゆえに手を持っている》（アリストテレス）とも言われている。

しかし、その類いのことばのなかでも、とくに私の気に入っているのは、《手は脳の外在化されたものだ》というカントのことばである。なぜなら、その命題の主張を歪めずに十分に生かしつつ、裏返すことで、③《^③》^③ と言いうるからである。後者は、ともしれば脳に対する過大評価がなされたり、人工知能の開発が盛んに行われたりしてきているいま、見失っ

てはならない観点であろう。

あらためて言うまでもなく、技術の出発点は人間の道具の使用にあり、道具の使用には手の働きが「カイザイ」している。その点で、人類進化の過程において、手の成立は決定的な意味を持っている。したがって、一見迂遠のようだが、技術という問題のいわば根っこを押さえておくために、ホモサピエンス（人類）における手の成立の持つ決定的な意味を、捉えておく必要がある。

脳と手との相関的な発達によってはじめて、人間は人間になったとさえ言える。人間において手は、四足獣の場合のように歩行の器官であることをやめ、そこから解放されて把握の働きを、そしてさらにものを加工してつくり出す働きをするようになった。また、手のそのような発達は、口を把握の器官であることから解放し、直立歩行による脳の発達と結び付いて、人間の分節言語をもたらしたのであった。もちろん、その分節言語も一種の道具であり、それが逆に人間の脳の発達を促進したのである。

《もし人間に手が欠けていたら、四足獣の場合のように頭の諸部分は、自分を養えるように形づくられていただろう。草を引き抜くために顔は細長い形をとり、突き出して、角化した固くて厚い唇を持ち、鼻孔の辺で細くなったであろう。（……）軀に手がなかったらどうして体内に分節化した音声がつくられたであろうか。また口をとりまく部分の構造も、言語活動の要求に合わなかったであろう。》

こう述べているのは、四世紀末のニュッサのグレゴリウス（『人間創造論』）である。ルロワ＝グーランも『身振りと言葉』において言うように、この東方教会の一神父によって千六百年前に言われたことは、手と脳の関係について現在の古生物学や動物学の「チケン」に照らして少しも時代の落差を感じさせないし、今でもなお通用するすぐれた「ドウサツ」を含んでいる。

ルロワ＝グーランは書いている。古生物学によれば、古生代（約六～四億年前）の魚類から第四紀（新生代の末、百五十万年前から現在まで）の人類に至る進化・発展の過程で、生物は相次ぐ一連の解放に「ソウグウ」する。「水からの「A」の解放」、（地面からの「B」の解放）、（移動からの「C」の解放）、そして（重い顔面からの「D」の解放）の四つである。そして、この長い進化の過程で、手と脳とが主として関わるのは、後の二つの段階、とくに最後の段階である。ここで人類は、軀の骨組が両足で歩くのに適したようになり、前肢つまり手が自由になった。こうして脳の発達が促進させられるのだが、それによって④人間

活動の全身的な統合がいつそう進み、ますます精妙な一貫性を表現していくことになる。その中心をなすのが、手と脳との密接な結び付きのうちにあられる、ものを製作する能力と言語能力にほかならない。

(中村雄二郎『問題群』より)

問1 傍線部ア～オのカタカナの語を漢字で記せ。

問2 傍線部①「その定義」は何の定義か答えよ。

問3 傍線部②の作者の意図を具体的に説明しているものを次の中から選んで記号で答えよ。

- a 人間が謎に満ちていることを認めた上で思索を続け、機械と人間の関係の可能性と限界を見極めるべきである。
- b 人間が謎に満ちているという答えで思考を停止するのではなく、人間と機械の関係について思索すべきである。
- c 機械に関する定義の制限のない拡大を認め、人間と機械の関わりについてその拡大の上に思索していくべきである。
- d 機械に関する定義が未確定なままであったとしても、機械と人間の関係の可能性と限界を見極めるべきである。

問4 空欄③の中にはどのような表現が入るか。十五字以内で書け。

問5 AからDの中には、それぞれどのようなことばが入るか。次のことばの中から選んで、記号で答えよ。

- ア 足
- イ 頸部
- ウ 呼吸器
- エ 脊髄
- オ 全身
- カ 手
- キ 頭部
- ク 脳髄

問6 傍線部④の内容を七十字以内で具体的に説明せよ。

4

出典：鷲田清一

『普通をだれも教えてくれない』

広島大学 文・教育学部 (一部改編)

制限時間 40 分

解答・解説DVD — Disk 3

【偏差値換算表】

46 点	—	偏差値 75
42 点	—	偏差値 70
36 点	—	偏差値 65
★32 点	—	偏差値 60
30 点	—	偏差値 55
28 点	—	偏差値 50

(★マークは合格ライン)

【四】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

身体がだれかの所有物ではないということは、その処遇の決定者が一生のあいだに何度か変わる、という点からもうかがうことができる。幼児は親ないしは別の成人の庇護ひごのもとで育つ。病気やけがといった、その身体に起こることの処置はその庇護者が決める。やがて成長とともに、^①その身体はその身体がそれであるところの「だれ」かのものとなる。が、人生の終わりにふたたびその身体の処遇を決する者は、家族ないしは別の介護者になる。だれか一人のひとがその身体を終生生きるといふことは、ふつうありえない。ひとはじぶんで臍へその緒を切ることはできないし、じぶんで棺桶かんばんに入ることもしない。身体は主体の器官として生きられもするが、他者との共同生活のなかで生きられもする。ひとは身体を所有するというよりもむしろ、当該人物を中心としてそのまわりのひとがその身体の世話を焼く、お守りをする、いじる、いっしょに使う……と言ったほうが、だからまだ抵抗が少ないかもしれない。

身体が二十世紀に、さまざまの言説の主題となってきたその場面というものを考えてみると、身体はボディ（物質体）のかわりに問われているのではないことがわかる。そう、語りだすのは、「謎なぞとしての身体」（萩原朔美監修『うつしとられた身体』）の多木浩二である。そのなかで多木はつぎのように語る。

「ひとつ非常にはつきりしていることは、たまたま今、身体論ないし身体という言葉がしばしば使われていますが、これは野生的なものとか、力とか、あるいは運動とか、あるいはある種の衝動とか、ということとはつまり人間の生命というものをいちばん根源のところまでとらえるという発想から出てきていることです。」

身体はときにわたしのもの、あるいはわたし自身であり、身体はときにほとんど無人称アのものである。わたしはときに身体そのものになる。なにかある作業に集中しているとき、わたしの指は、わたしの脚はほとんどわたしの意志そのものになっている。身体はそのとき、わたしの存在であり、わたしの器官である。あるいはラグビーの選手。彼が敵の選手のあいだを軽快にステップをa)ブんで、あるいはフェイントをかけて駆け抜けるとき、彼の意志はほとんど身体の意志である。身体の隅々にまで彼

の存在が、ジュウマンしているとも言えるし、彼の存在は身体のおちこちに溶けて、彼という意識すら存在しないとも言える。人称性が一〇〇だとも言えるし、ゼロだとも言える。

わたしはまた、ほとんど身体のなかに溺れてしまひもする。スイマに襲われるとき、身体の波に呑み込まれてしまうとき、耐えがたい痛みにきりきり苛まれるとき、少なくともその身体はわたしのものではない。わたしはそのとき、文字どおり身体に持たれて（＝凭れて）いる。

この人称と身体のたわむれ、それじたいが多木が「生命の根源」という言葉で言い当てようとしていたものなのだろう。身体におけるこうした人称の凝集と溶解、あるいは諸人称の交差と交感が、生きた身体の状態である。

臓器の移植や交換が話題になるときは、身体に対してまったく別の視線が向けられている。それは、人称性を解除された、単独の物質体としての身体、つまりは生きていない身体へのまなざしである。「生命の根源」を解除されている、という意味で、死んだ、非人称の身体へのまなざしだ。

問題なのはだから、身体は交換・移植可能かということではない。物質体であるかぎりでは、身体はあきらかに交換も移植も可能である。が、特定のだれかによって生きられ、さらにはそのひとの関係するひとたちによっても生きられているものとしての身体は、そうではない。臓器とか肢体というふうには、人体を分解して表象することそれじたいにすでにどこかなじみにくいもの、おぞましいものがある。家人の手術後、医師にその臓器を見せられるとき、あるいは家人の遺体焼却後、火葬場の職員にその骨を見せられるときの、なんとも割り切れない気持ちというのも、そういうところからおそらくくるのだろう。

問題はむしろ、身体はもともと交差や交感といった関係——メルロ＝ポンティという哲学者はこれを「間身体性」(intercorporeity)と名づけた——のなかにあるのに、どうしてまるで単体のボディとして皮膚のうちに閉じ込められているかのように表象されているのか、体験されているのか、ということにある。

わたしたちの身体はいま、^②二重の意味で、このような間身体性という、生きた身体にとつてもつとも本質的な関係を解除されかけている。一つは、自他の身体への関与、つまりは身体間の交通関係が超個人的なシステムを迂回せざるをえなくなっている。

ることである。医療においては、人びとがたがいに先行する世代から受け継いだ知恵ちえにもとづいて相互に治療しあうという場面は、もはや見受けられない。またじぶんの内部で起こっていることを知るのに、だれもが医師の診断をおおぐ。間身体性は制度化された医療システムに置き換えられる。自己の身体についての知は公的な医療システムによって独占されている。ひとはそういう非人称の空間を迂回してしか自己の身体にかかわれなくなっている。

第二に、身体が単体の物質体として表象されるというのは、それがそれを生きている当のひとだけのもの、その意味でプライベートなものとしてイメージされているということである。個人の存在は、プライベートな身体——プライベート（private）とはもともと「奪われている・剥奪はくたつされている」（privé, deprived）という意味であり、それはつまり「他者との関係を欠いている・公共的な意味を欠いている」ということなのである——に閉じ込められる。ひとはみずからの身体に対して、当然の権利のようにしてナルシスティックな所有権を行使するようになる。ひとは、^③単体としての幻想的な身体のなかに密封されることによって、同時に他の身体への通路をも失ってしまう。

ここで重要なことは、複数の身体の共存や交感の関係からその〈交通〉という契機をあらかじめ解除したうえで、各主体のそれぞれに各身体の排他的な所有権（property）をあてがうという、二段階の操作である。この操作をつうじて身体はだれかの「私有財産」（private property）となる。「わたし」がこの身体の「所有者」となるのである。肢体や臓器が「わたしの所有物」となるのである。^④タイシヤクも譲渡も可能な「財」になるのである。

しかし、物質体であるというのは、また単体のプライベートな存在であるというのは、身体にとつてむしろ倒錯的な事象なのではないだろうか。前者は身体がいのちなきものとみなされてはじめて出現する事象、後者は身体が他の身体との関係を解除されたときにはじめて出現する事象なのではないだろうか。

生命がうごめきだすもつとも原初的な場面、たとえば摂食行為ひとつとっても、それはわかる。過食や拒食といった摂食障害は、多くのばあい他者との関係の困難がその遠因になっている。独り暮らしをはじめると食欲のコントロールが狂うことがある。食べるという行為がいつ始まっていつ終わるか、それが不明になり、食欲のリアリティというものが薄れていって、加減がわか

らなくなるのである。あるいは、環境の変化（たとえば高齢者の入院）が極端な過食や偏食をひき起こすことがある。他人との共同生活のなかである段取りにしたがって食事をするのが、単体の身体を生きる個人の生理的活動の^eヨクヨウをおのずから調整しているという面があるのであって、そういう他の身体との関係の解除が、生きるということの核にあるはずのもの、それがを外してしまうことがあるのだ。

（鷺田清一『普通をだれも教えてくれない』による）

問1 文章中の傍線部 a ～ e のカタカナの部分に漢字で書け。

問2 傍線部①に「その身体はその身体がそれであるところの「だれ」かのものとなる。」とある。これはどのような意味か。本文中の言葉を用いてわかりやすく説明せよ。

問3 傍線部アの「無人称」と、傍線部イの「非人称」とはどのような意味の違いがあるか。六十字以内で説明せよ。

問4 傍線部②に「二重の意味で、このような間身体性という、生きた身体にとっても本質的な関係を解除されかけている。」とある。「二重の意味」を端的に説明している一文を、本文中から抜き出し、その終わりの十字（句読点や符号を含む）を書け。

問5 傍線部③に「単体としての幻想的な身体のなかに密封される」とある。なぜ「幻想的な身体」と言えるのか。そのことをわかりやすく説明せよ。

(以下余白)

5

出典：夏目漱石

『思い出す事など』

青山学院大学 文学部 (一部改編)

制限時間 20 分

解答・解説DVD — Disk 3

【偏差値換算表】

50 点	—	偏差値 70
45 点	—	偏差値 65
★42 点	—	偏差値 60
38 点	—	偏差値 55
34 点	—	偏差値 50
30 点	—	偏差値 45

(★マークは合格ライン)

【五】 次の文章は、夏目漱石の『思い出す事など』の一節である（ただし、表記は現代仮名遣いに変えてある）。読んで、後の問に答えよ。

修善寺（注）しゆぜんじにいる間は仰向（注）あおむけに寝たままよく俳句を作つては、それを日記の中に記け込んだ。時々は面倒（注）めんどうな平仄（注）ひょうそくを合して漢詩さえ作つてみた。そうしてその漢詩も一つ残らず未定稿として日記の中に書き付けた。

余よは年来俳句（注）あに疎そくなりまさつた者である。漢詩に至つては、殆んど当初からの門外漢といつてもいい。詩にせよ句にせよ、病中にでき上つたものが、病中の本人にはどれほど得意であつても、それが専門家の眼に整つて（ことに現代的に整つて）映るとは無論思わない。

けれども①余が病中に作り得た俳句と漢詩の価値は、余自身からいうと、全くその出来不出来に関係しないのである。平生（注）へいぜいは如何（注）いかに心持ちのよくない時でも、いやしくも塵事（注）じんじに堪え得るだけの健康を有つていと自信する以上、また有つていと人から認められる以上、われは常住日夜共に②生存競争裏に立つ悪戦の人である。仏語（注）ぶつごで形容すれば絶えず火宅の苦を受けて、夢の中でさえ焦（注）いらいら々している。時には人から勧められる事もあり、たまには自ら進む事もあつて、ふと十七字を並べてみたりまたは

A の四句位組み合せないとも限らないけれども③何時（注）いつもどこかに間隙（注）まひらがあるような心持ちがして、隈（注）くまも残さず心を引き包んで、詩と句の中に放り込む事が出来ない。それは歡樂（注）ねたを嫉む実生活の鬼の影が風流（注）ふうりゅうに纏（注）まとむるためかも知れず、または句に熱し詩に狂するのあまり、かえつて句と詩に翻弄（注）ほんろうされて、いらいらすまじき風流にいらいらする結果かも知れないが、それではいくら佳句と好詩ができたにしても、贏（注）かち得る当人の愉快はただ二、三同好の評判だけで、その評判を差し引くと、後に残るものは多量の不安と苦痛に過ぎない事に帰着してしまふ。

B 病氣（注）びやうきをすると大分趣（注）おもしろが違つて来る。病氣の時には自分が一步現実の世を離れた気になる。他（注）ひとも自分を一步社会から遠ざかつたように大目に見てくれる。此方（注）こちには一人前働かなくても済むという安心ができ、向うにも一人前として取り扱うのが気の毒だという遠慮がある。そうして健康の時にはとても望めない長閑（注）ながひらかな春がその間から湧いて出る。この安らかな心が即ちわが

句、わが詩である。従つて、出来栄の如何は先ず措いて、できたものを太平の記念と見る当人にはそれがどの位貴いか分らない。病中に得た句と詩は、退屈を紛らすため、閑に強いられた仕事ではない。実生活の圧迫を逃れたわが心が、本来の自由に跳ね返つて、むつちりとした余裕を得た時、油然と漲ぎり浮かんだ天来の彩紋である。われともなく興の起るのが既に嬉しい。その興を捉えて横に咬み豎に砕いて、これを句なり詩なりに仕立上げる順序過程がまた嬉しい。漸く成つた暁には、④形の無い趣を判然と眼の前に創造したような心持ちがして更に嬉しい。はたしてわが趣とわが形に真の価値があるかないかは顧みる違さえない。『思ひ出す事など』の中に詩や俳句を挟むのは、単に詩人俳人としての余の立場を見てもらうつもりではない。実をいうとその善悪などはむしろどうでもいいとまで思っている。ただ当時の余はかくの如き情調に支配されて生きていたという消息が、一瞥の迅きうちに、読者の胸に伝われば満足なのである。

秋の江に打ち込む杭の響かな

これは生き返つてから約十日ばかりしてふとできた句である。澄み渡る秋の空、広き江、遠くよりする杭の響、この三つの事に相応したような情調が当時絶えずわが微かなる頭の中を 徂徠した事はいまだに覚えている。

別るるや夢一筋の天の川

何という意味かその時も知らず、今でも分らないが、あるいは仄に 東洋城と別れる折の連想が夢のような頭の中に這回つて、恍惚とでき上つたものではないかと思う。

当時の余は西洋の語に殆んど見当らぬ C という趣をのみ愛していた。その C のうちでも茲に挙げた句に現れるような一種の趣だけをとくに愛していた。

秋風や唐紅の咽喉仏

という句はむしろ実況であるが、何だか殺気があつて、ガンチクが足りなくて、口に浮かんだ時から既に変な心持ちがした。

風流人未死。病裡領清閑。日々山中事。朝々見碧山。

余の如き平仄もよく弁えず、韻脚もうろ覚えにしか覚えていないものが何を苦しんでそれらの工夫を敢てしたかという、実

は自分にも分らない。けれども、詩の趣は王朝以後の伝習で久しく日本化されて今日に至ったものだから、われわれ位の年輩の日本人の頭からは、容易にこれを奪い去る事ができない。余は平生^⑤事に追われて簡易な俳句すら作らない。詩となると億劫おっくうでお手を下さない。ただかように現実界を遠くに見て、杳はるかな心こころに些すこしの蟠わだかまりのないときだけ、句も自然と湧き、詩も興に乗じて種々な形のもとに浮んでくる。そうして後から顧みると、それが自分の生涯の中で一番幸福な時期なのである。風流を盛るべき器が、無作法な十七字と、佶屈きくつな漢字以外に日本で発明されたいざ知らず、さもなければ、余はかかる時、かかる場合に臨んで、^⑥何時でもその無作法とその佶屈きくつとを忍んで、風流ふうりゅうを^⑦這裏こゝに楽しんで悔いざるものである。そうして日本に他の恰好かっこうな詩形のないのを憾うらみみとは決して思わないものである。

(夏目漱石『思い出す事など』)

(注)

1 修善寺に在る間は仰向に寝たまま——明治四十三年、伊豆修善寺温泉(現在の静岡県伊豆市にある)で胃潰瘍の転地療養中の漱石は、大吐血をして一時生死の境をさまよった。幸い命は取りとめたが、まだ小康状態で床に臥せったままの状態であった。

2 平仄——漢詩における韻律上の規則。

3 纏る——まとわりつく。くっついて離れない。

4 徂徠——行き来する。

5 東洋城——門下生の松根豊治郎。東洋城は彼の俳号。

6 這裏——こゝ。

問1 傍線部 a 「疎く」の漢字部分の読みを平仮名で書け。

問2 傍線部 b 「ガンチク」を漢字に直せ。

問3 傍線部①「余が病中に作り得た俳句と漢詩の価値は、余自身からいうと、全くその出来不出来に関係しないのである」とあるが、どうして「出来不出来に関係しない」というのか。その説明として最適なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。
ア 句に熱し詩に狂した作句・作詩の過程を経験しないで、終始余裕を持った心と創作態度で作ることができたから。
イ 俳句や漢詩が、たとえ二、三の同好の評判を得られたにすぎないとしても、評価を受けたこと自体、十分に喜ばしいことであつたから。

ウ 悪戦苦闘の人であるにもかかわらず、その中から火宅の苦を乗り越えた俳句や漢詩ができたから。
エ 一步現実から離れた気になって、本来の自由を得た心をそのまま俳句と漢詩に表現できたから。
オ 退屈を紛らわせるための閑に強いられた仕事ではなく、自分自身のために作句・作詩した自信作であつたから。

問4 傍線部②「生存競争裏」の「裏」と同じ意味を含む熟語を、次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 裏方 イ 裏打 ウ 表裏 エ 脳裏 オ 裏面

問5 空欄 A に入れるのに最適な四字の漢字を書け。

問6 傍線部③「何時もどこかに間隙があるような心持ちがして」とあるが、何と何との間に「間隙がある」と言うのか。その説明として最適なものを、次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 愉快であろうとする心と、日夜悪戦する自分の姿とに間隙がある。

イ 表現したいと思っていることと、俳句や漢詩という形式にのせることとに間隙がある。

ウ 人から勧められて作句・作詩することと、自分から進んで作句・作詩することとに間隙がある。

エ 自分では健康な身体をもっていると思っていたことと、実際の身体の状態とに間隙がある。

オ 目覚めているときの火宅の苦と、眠っているときに見る夢とに間隙がある。

問7 空欄 B に入れるのに最適なものを、次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア そうして イ ところが ウ すなわち エ それ故に オ また

問8 傍線部④「形のない趣」と同じ意味内容で文中に用いられている最適な一字を、次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 紋 イ 春 ウ 興 エ 閑 オ 詩

問9 二箇所空欄 C に入れるのに最適な二字の熟語を、「当時の余は西洋の語に」から、最後の「憾みとは決して思わな

いものである。」までの文章中より、抜き出して書け。

問10 傍線部⑤「事に追われて」の「事」と違う意味の熟語を、次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 俗事 イ 世事 ウ 仕事 エ 往事 オ 些事

問11 傍線部⑥「何時でもその無作法とその佞屈とを忍んで」とは、どのようなことを言っているか。その説明として最適なものを、次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 俳句における約束事や漢詩における堅苦しい漢字の並びに、いつも苦心しながら作ること。

イ 五七五という少ない字数や漢字の羅列にいつも辟易しながら強いて作ること。

ウ 俳句の作法にも難しい漢字にも通じていないが、それでも俳句や漢詩の表現形式が存在することをいつも有り難く思いながら作ること。

エ 作法のやかましい俳句や漢詩でない別な表現形式がないものか、といつも思いながら作ること。

オ 俳句の作法や漢字の選択に違和感はないが、しかしいつも自己表現できない文才の無さを恥じながら作ること。

問12 夏目漱石が俳句や漢詩を作る上で、影響を受けた友人は誰か。次のア～オから一人を選び、記号で答えよ。

ア 中島敦

イ 森鷗外

ウ 芥川龍之介

エ 乃木希典

オ 正岡子規

(以下余白)

二 正高信男『子どもはじとばをからんで覚える』

/50

問 1	イ	ロ	ハ	ニ	2点 × 4																							
問 2	ア	カ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ	ヘ	フ	ブ	10点					
問 3	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ	ヘ	フ	ブ	2点 × 5
問 4	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	2点 × 5																						
問 5	甲	乙	4点 × 2																									
問 6																												

五 夏目漱石『思ひ出す事など』

問1		4点
問2		4点
問3		4点
問4		4点
問5		5点
問6		4点
問7		4点
問8		4点
問9		5点
問10		4点
問11		4点
問12		4点

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--